

白井 浩子

ウサギる



野上さんの懐かしい話を読みました(本紙No.52に掲載)。科学の成果を技術として暮らしに役立てることは素晴らしいですね。そうして、失ってはいけないものを維持することも、ほんとうに大事ですね。

おかやま環境ネットワークで開講している連続の「環境講座」の私のテーマは『エコロジカル・フットプリント計算』です。これは『ウサギる』ということです。

『ウサギる』って、生物学の専門柄、私の造語でして、「全体を見渡して初めて適切な対処ができる」ということです。

ウサギを飼ったことがありますか。かつて、一つがいを放し飼いにしました。その2匹は家屋のコンクリート基礎の或る一箇所の下に穴を掘り、基礎囲いの中に入ってしまい、そこから数ヶ月に

一度、子どもたちがのこのこ出てきました。

さて『ウサギる』ですが、庭に放したときに彼らがどうするかというと、草を食べたり、ちょんちょんと臭いをかいだりしながら塀にそって一回りします。一回りが閉じると、もうどこにいても、塀の外で犬がほえても、殆ど一瞬の水平飛びで先述の安全な穴に逃げられるのです。塀回りの偵察!が閉じないうちは、何か異常な事態に会うと、あたふたとあちこちします。

こんな習性はもちろん、野生からの受継ぎでしょう。

ノウサギは、野原という生活範囲のどこでキツネやオオカミがガサッと音を立ててもすぐに大きな耳で捉え、安全な巣に逃げます。生活範囲をいつも見渡している、むしろ見渡せる範囲で暮らすのです。そうでなければ生存できないのです。「音や臭いなどの一次刺激の情報」が一段上位で統合して位置確認となる、「全体における自分の位置の地図を持っている」と研究が進んでいます。

これを人間に引き寄せて見ると、人間は耳からに加えずと遠く広い範囲を身渡し、自分に関わる全体が広いです。宇宙にも視野が届いています。

そうそう、この夏「剣岳」初登頂をテーマにした映画がありました。その中で、「人はどうして山に登るか。全体を見ないではいけない欲求をもつのだ」と主人公が人間の特性を思いました。

全体を知ろうとする性質や能力は、もとは動物から受継ぎ根深いものです。でも、その性質は人間ではずっと知的で自覚的です。社会に生き言葉をもった人間では記憶力も予測力も大きく、目的をつくれて、維持・育成も破棄・訣別も自覚してできます。それで「人類は環境の異変に対し、訳を知り適切な対処を合意して進められる」という確信には根拠があるのです。

「ウサギる」本性に、何と励まされることか!



白井浩子氏

1943年生まれ。横浜市出身。元・岡山大学教員(生物学)。第14回猿橋賞受賞。現在「余剰進化論」を提唱。(財)おかやま環境ネットワーク理事。